

戦後日本社会における「国家神道」概念の形成

國學院大學 藤田大誠

1 背景と目的

「国家神道」なる概念については長年、戦前の日本社会を特徴付ける神社・神道や宗教、思想に関する重要概念の一つと見なされ、国内外における多様な専攻分野の研究者から注目されてきた。また、「国家神道」という言葉は、戦後日本の政教問題において、主に負のイメージで取り上げられることが多いが、その内実は曖昧に解釈されたまま、一般社会に流布している用語の典型でもある。

そもそも、戦後日本社会の政治的・思想的・宗教的イデオロギー的対立をめぐる中で始められた「国家神道」研究は、一方では神社、皇室祭祀、慰靈顕彰、教育勅語、学校儀礼、国体論など、文脈の異なる諸要素を予め含み、全体性を重視して外延の広い「国家神道」概念を構成するという、主に宗教学で顕著に見られる演繹的方法があり、他方、斯様な方法は未だ実証性を欠くと見る歴史的研究では、国家と神社との結合状態を必要条件とした上で諸要素の関係から全体像を捉えようとする帰納的方法が多く、両方法の乖離と擦れ違いは甚だしい。現状では、歴史的評価以前の「史実」認定レベルの相互理解に当たってさえ、「国家神道」なる概念こそが一番のネックとなってしまっている。

それ故、本報告では、「国家神道」なる概念の淵源と系譜を辿り、戦後日本社会においてその概念がどのように形成され、広く一般に定着していったのかについて検討することを目的とする。

2 研究方法

具体的には、戦前、即ち近代日本社会における「国家神道」概念の形成前史を踏まえつつ、主に占領期の昭和20年（1945）12月15日、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）より日本政府に対して発出された「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廢止ニ關スル件」（略称・神道指令）において、初めて公式に使用された「国家神道」（State Shinto）概念をメルクマールとして、占領期における帝国議会や神社界、宗教界、学界、論壇などにおいて、如何に「国家神道」なる語が受容され、その概念の内包がどのように展開していったのかを考察する。

3 結果と結論

近代には、「国家神道」なる語や加藤玄智が提唱した「国家的神道」概念の使用はあったが、必ずしも一般化していない。それよりも昭和戦前期における「神道」という言葉自体が、当時の「現実」をそのまま説明するものではなく、希望的観測や「理想」が多分に籠められた、極めて広範な諸要素を包含して拡張化かつ重層化された肯定的・積極的概念、一種の共同幻想的な共通基盤であったことから、そこに戦後一般化する外延の広い「国家神道」概念（その評価は反転）のルーツがあった。

また、「国家神道」なる用語が明確に打ち出された「神道指令」直後から、この語は立場を問わず各所で使用され、日本社会に流布するようになった。しかし、本指令が指示する極めて多様な禁止内容や両義的で聊か不明瞭な「国家神道」概念の定義のため、後進の論者たちによって「国家神道」概念は戦略的に拡張されがちとなった。靖國神社問題などにおける先鋭な対立構図を背景とする中で、頗る外延の広い「国家神道」概念を演繹的に構成して論じる藤谷俊雄や村上重良の「国家神道」論が登場し、それは憲法学説や判例、マスコミ報道などを介して一般社会に定着していったのである。

文献

藤田大誠, 2011, 「「国家神道」概念の有効性に関する一考察—島薗進著『国家神道と日本人』の書評を通して—」『明治聖徳記念学会紀要』復刊48.

山口輝臣編, 2018 (刊行予定), 『戦後史のなかの「国家神道」』山川出版社.